問題と目的

終末期医療とは死生観 医師や看護師をはじめとする医療従事者は、このような状況のなかで、生や死をどのように受け止め、医療や看護を実践していくかという課題に取り組んでいる。特に看護師は、患者の身の回りの世話をすることも多いため、終末期医療における患者との関係の中で複雑な思いを抱くことも少なくない。

終末期にある患者にどのようなケアを行えばよいかということは、看護師にとって大きな課題である。デークス（1987）は、「ベテランといわれるナースであっても、終末期医療において感じる絶望的な無力感と、死を直視しれない恐怖感は意外に根深いのではないか」と述べ、終末期医療を担当する看護師が持つ、こうした恐怖や不安をしっかりと見据えることの必要性を強調している。生や死に関する観念は一般には死生観と呼ばれ、その形成には人間観、人生観、宗教観など様々な個人の価値観が関わっている。看護師の持つ死生観は看護行為に影響を与えるという指摘（平山、1991）や、病いや健康、生や死をめぐる人間の行動、ケアの行動や

森田 美弥子
大西 呂尚

目標はその集団が持つ価値観や信念等によって様々であり、それらが密接に関連するとの指摘（Leiningher, M. M., 1992）があり、看護師が死生観を培うことは重要だと考えられる。

看護学生と死生観 看護教育において死をどう取り上げるかということは意味のある検討課題となる。山本（1992）は、死の主観化（自己の死として死を受け止めること）を考えた場合、20歳半ばにおいて職場に出たたんに他者の死に直面しなければならない看護師にとっては、自己の死の主観化が未完成のうちに他者の死に直面を強いられることになり、本人をどう受け止めてよいか分からず、混乱に陥ったり燃え尽き状態になったりすることが少なくないとし、看護学生に対する死生学教育の必要性について述べている。谷（1991）も同様に、医療現場での複雑な問題に対処するために、その年齢に応じた死生観を培っておくことが重要であると述べている。

先行研究では、実習や授業に焦点を当てその前後で死や患者に対する思いがどのように異なるか検討したものが多く見られる。新見（2002）は、看護学生が持つ人生の意味・目的意識と死や病気、苦悩観についてかなり、教育の中での関わりを検討している。菊池（2000）は、看護学生が死をどう理解するかどのように体験しているかを調査している。竹下（2001）は、臨地実習を通じて死を考える機会がどのように変化したのか、実習前後の比較検討を行った。茶園ら（2003）は、終末期看護実習における死の理解、終末期患者や終末期看護に対する考え方の変化を明らかにすることを研究の狙いとし、実習後では、患者を死にゆく人とする見方からまだ生きている人とする見方へと変化したとの報告がなされている。大山ら（2003）は、看護職と看護学生の死生観の傾向および違いについて分析した結果、「学生も看護職ともに死の不安・恐怖は高かった。学生と看護職の間に有意差がみられなかったことから、看護教育においては不安・恐怖を低減するアプローチよりも死からの回避をしないというアプローチが必要になってくるだろう」としている。

1）名古屋大学大学院教育発展科学研究科博士課程（前期課程）
このように、看護学生たちは臨床実習で死に関して多くのことを学んでいると思われる。では、実習以前なら
わち看護師を志したばかりの段階では、同年代の青年たちとの間で死観の相違はあるのだろうか。看護学生の
持つ死観の特徴をとらえることができれば、彼らがそ
の後どのように死生観を培っていくのか、またそのため
にどのような教育が必要なのかを、さらに明確にしてい
くことができるだろう。本研究ではこのような視点に立
ち、看護師を目指す学生にとって将来現場で終末期医療
に携わる際に重要となる死生観に注目した。

死生観への接近方法 これまでは、質問紙を用いて死生観を構成する因子を明らかにしようとした研究が多い
（丹下 1995、平井 1999、Templer, D. I. 1970、
Colletto, & Lester, P. 1969、Hoelter, J. W. 1979、
金児 1994、Gesser, G., Wong, P. T. P., & Reker,
G. T. 1987、河合・下仲・中里 1996）。これらの研究成
果を看護教育に関連付けていく場合、河津ら（1982）によ
れば、次のような特徴を挙げることができる。死生観の
一般的な傾向を知る。概念レベルでの死生観を捉える。
知的解析に頼りがち、あるべき姿となりやすい、などが
ある。したがって、看護学生一人一人のものの見方、考
え方として内面に紛れ込まれている死生観を把握しよう
とするためには、異なったアプローチが要求されると考
えられる。例えば、本人によって紡ぎ出される言葉を用
いる。イメージレベルでの死生観を捉える。知的側面だ
けでなく情けの側面にもアプローチする。外からの教育
としてインプットするのではなく、本人自身の中から出
てきた死生観を感じとり、自分から変化を生じさせる、
といったことを重視することになる。このような立場に
立つ方法として、河津ら（1982、2004）は、死生観その
ものに対するアプローチではないが、連想言語という方
法を用いて、看護師像や看護に対する自らのイメージに
ついて理解を深めるための授業や研修を試みている。そ
の結果、内在していた思いの顕在化、新たな気づき・再
認識。学びの共有、今後の課題の発見等々、受講生たち
がより深い学びの様相を呈していたことが把握できたと
している。河津らの方法は、看護という言葉から連想さ
れる他の言葉を挙げてゆき、それを詩のようにまとめた
上で絵を描くというものである。イメージが活性化され
やすく、質問紙に回答する方法とは異なる視点での結果
が得られると思われるが、実施に際して数時間を要する
と報告されている。

イメージレベルでの死生観をとらえる別の方法として、
「人生のイメージ画」（やまだ 2000、Yamada 2002）
という手法がある。やまだ（1988）は、イメージ画の効
用として次の5点を挙げている。①イメージ画は知的な
説明よりも、素朴だが根の深い感性に基づいて表現され
るので、より本音が表現される。②表現する際に意図的
に防衛をしたりすることが難しい、言語のように社会的
望ましさや価値観と直接結びついていることが少ない。
③絵による表現は文字や記号や数によるものに比べて情
報処理と情報伝達の方法として優れており、瞬時に全
体を把握できる長所がある。④日本人に適した表現形式
である。⑤異なる文化間で比較をするのに力を発揮する。
これらの効用のうち、最初の1点目から3点目に関して
は本研究の目的に服したものであると判断し、今回は人
生のイメージ画を用いて死生観をとらえることにする。

本研究の目的 看護学生の持っている死生観にはどの
ような特徴があるか、看護学を専攻しない同年代の学生
と比べてどのような差異があるのかを、「人生のイメージ
画」を用いて把握する。それによって、看護学生が生
の間に死生観をつくる過程を考えることで手がか
りを得る。仮説として、看護学生は看護学を学んでいない
大学生に比べて、相対的に多くの割合で描画の中に「死」
を何らかの形で描くのではないかと予想しているが、今
回は初めての試みであり、探索的に特徴をとらえていき
たい。

方法

対象 A県内にあるA高校看護科（5年課程）4年
生37名（男性1名・女性36名、年齢：18歳～19歳。記入
のあった36名の平均年齢18.3歳）、B県内のB看護専門
学校1年生35名（男性3名・女性32名）、B県内のX大
学1～2年生111名、うち理系学部39名（男性33名・女
性6名）、文系学部72名（男性14名・女性58名）
、年齢：18歳～51歳。記入のあった66名の平均年齢20.
1歳）。このうちA高校看護科の学生は、これまで2
週間の看護実習に出ているが、取るの経験などはな
い。

実施方法と実施期間 実施は2005年8月2日から8月
の上旬までの期間に、各学科の講義室において授業時間
の一部を利用して個別にて実施した。所要時間は約15分
〜20分であった。

「人生のイメージ画」（やまだ 2000、Yamada 2002）を
、以下の手続きで施行した。

A4の紙を1人1枚配布し、「人生の一生、生まれてか
ら死ぬまでを絵に描いてください。人間一般でも自分の
人生でもよいです。紙はどのように使っても構いません」
という教示を行った。途中、質問があった場合には、自
由に描きたいように描いてよい旨を返答した。描画後、
「何を描いたか、何故それを描いたか、など、紙の裏に
説明を書いてください」と伝えた。A高校看護科およ

—154—
びZ大学文系学部では、性別・年齢も記載するように求めた。Y看護学校およびZ大学理系学部においては、対象者が特定されることを避けるため性別、それらの記載を求めなかった。


A：死が描かれているか
B：人生がプロセスとして描かれているか
C：何によって人生を表現しているか

各側面の分類基準の詳細は、末尾に添付する。これにとづき分類を実施し、看護学生72名と大学生111名の比較を行った。

さらに、看護学生による人生のイメージ画について、特にプロセスに注目して代表例を抽出した。検討に当たっては、やまだ (1995, 2002a) による生涯発達のモデルを参考に用いた。

結果

(1) 分類的一致率

末尾に添付した分類基準により、183名の人生イメージ画を分類した。データ分類の妥当性を確認するために、心理学専攻している大学院生3名の協力を得た。コーネル (Cohen, 1960) のχ²係数を参考にして分類の一致率を計算した。ただし、今回は各分類基準におけるカテゴリが5か8個であり、偶然の一致率を考慮し無視できるときみなして一致率の計算を行ったところ、表1のよう

うな結果が得られた。

<p>| 表1 各学校における分類基準ごとの一致率 | 一致率 (%) |</p>
<table>
<thead>
<tr>
<th>分類A</th>
<th>分類B</th>
<th>分類C</th>
</tr>
</thead>
<tbody>
<tr>
<td>X看護</td>
<td>84.2</td>
<td>94.7</td>
</tr>
<tr>
<td>Y看護</td>
<td>94.3</td>
<td>85.7</td>
</tr>
<tr>
<td>Z大文系</td>
<td>94.4</td>
<td>88.9</td>
</tr>
<tr>
<td>Z大理系</td>
<td>100.0</td>
<td>85.0</td>
</tr>
</tbody>
</table>

(2) 分類基準ごとの出現頻度

分類基準A（死を描くか）について、結果を表2に示す。何らかの形で死を描いている者（A2～A4の合計）が、X看護75.7%、Y看護54.3%、Z大（文系）75.0%、Z大（理系）58.3%を占めた。さらに、その中で、象徴的表現での死を描く者（A4）がどの群でも最も多かった。

分類基準B（生まれてから死ぬまでのプロセスを描くか）の結果を表3に示す。プロセスを描いている者が、X看護81.1%、Y看護94.3%、Z大（文系）86.1%、Z大（理系）92.3%を占めた。そのうち、いずれの群でも多いのは、平面型（B6）であった。それ以外のカテゴリーについては、下段のプロセス（B4）を描いたがX看護の生徒1名のみであったことから、B4の出現頻度は全般的に低いと考えられる。

分類基準C（何を描いたか）の結果を、表4に示す。人生を描いている者が最も多く、X看護40.5%、Y看護82.8%、Z大（文系）61.1%、Z大（理系）84.6%とあったが、描かれた人が自分であるか（C1）人間一般

<p>| 表2 分類基準A（死を描かれるか）の回答者の人数と割合 (%) 内は% |</p>
<table>
<thead>
<tr>
<th>学 校 名</th>
<th>分 類</th>
<th>A（死を描かく）</th>
<th>合 計</th>
</tr>
</thead>
<tbody>
<tr>
<td>X看護</td>
<td>描かない (A1)</td>
<td>8(21.6)</td>
<td>37(100.0)</td>
</tr>
<tr>
<td>Y看護</td>
<td>独りの死 (A2)</td>
<td>5(13.5)</td>
<td>37(100.0)</td>
</tr>
<tr>
<td>Z大文系</td>
<td>周囲の人 (A3)</td>
<td>0(0.0)</td>
<td>37(100.0)</td>
</tr>
<tr>
<td>Z大理系</td>
<td>象徴的 (A4)</td>
<td>23(62.2)</td>
<td>37(100.0)</td>
</tr>
<tr>
<td></td>
<td>分類困難 (A5)</td>
<td>1(2.7)</td>
<td>37(100.0)</td>
</tr>
<tr>
<td></td>
<td>合計</td>
<td>37(100.0)</td>
<td>37(100.0)</td>
</tr>
</tbody>
</table>

<p>| 表3 分類基準B（プロセスが描かれるか）の回答者の人数と割合 (%) 内は% |</p>
<table>
<thead>
<tr>
<th>学校名</th>
<th>分 類</th>
<th>B（プロセスが描かれるか）</th>
</tr>
</thead>
<tbody>
<tr>
<td>X看護</td>
<td>プロセスでない (B1)</td>
<td>2(5.4)</td>
</tr>
<tr>
<td></td>
<td>円環 (B2)</td>
<td>5(13.5)</td>
</tr>
<tr>
<td></td>
<td>上昇 (B3)</td>
<td>1(2.7)</td>
</tr>
<tr>
<td></td>
<td>下降 (B4)</td>
<td>1(2.7)</td>
</tr>
<tr>
<td></td>
<td>ビーク (B5)</td>
<td>2(5.4)</td>
</tr>
<tr>
<td></td>
<td>平坦 (B6)</td>
<td>21(56.8)</td>
</tr>
<tr>
<td></td>
<td>分岐 (B7)</td>
<td>0(0.0)</td>
</tr>
<tr>
<td></td>
<td>分類困難 (B8)</td>
<td>5(13.5)</td>
</tr>
<tr>
<td></td>
<td>合計</td>
<td>37(100.0)</td>
</tr>
<tr>
<td>Y看護</td>
<td>0(0.0)</td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td></td>
<td>1(2.9)</td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td></td>
<td>0(0.0)</td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td></td>
<td>1(2.9)</td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td></td>
<td>28(80.0)</td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td></td>
<td>2(5.7)</td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td></td>
<td>35(100.0)</td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>Z大文系</td>
<td>4(5.6)</td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td></td>
<td>2(2.8)</td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td></td>
<td>3(4.2)</td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td></td>
<td>1(1.4)</td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td></td>
<td>55(76.4)</td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td></td>
<td>1(1.4)</td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td></td>
<td>6(8.3)</td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td></td>
<td>39(100.0)</td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>Z大理系</td>
<td>2(5.1)</td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td></td>
<td>0(0.0)</td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td></td>
<td>2(5.1)</td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td></td>
<td>1(2.6)</td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td></td>
<td>32(82.1)</td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td></td>
<td>1(2.6)</td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td></td>
<td>72(100.0)</td>
<td></td>
</tr>
</tbody>
</table>
表 4 分類基準 C（何が描かれるか）の回答者の人数と割合（％）内は％

<table>
<thead>
<tr>
<th>学校名</th>
<th>プロセスでない</th>
<th>円環</th>
<th>防具</th>
<th>アリーナ</th>
<th>ビーク</th>
<th>平坦</th>
<th>分岐</th>
<th>分類困難</th>
<th>合計</th>
</tr>
</thead>
<tbody>
<tr>
<td>札幌</td>
<td>8(21.6)</td>
<td>7(18.9)</td>
<td>0(0.0)</td>
<td>14(37.8)</td>
<td>3(8.1)</td>
<td>2(5.4)</td>
<td>2(5.4)</td>
<td>1(2.7)</td>
<td>37(100.0)</td>
</tr>
<tr>
<td>札幌</td>
<td>6(17.1)</td>
<td>23(65.7)</td>
<td>0(0.0)</td>
<td>2(5.7)</td>
<td>0(0.0)</td>
<td>1(2.9)</td>
<td>3(8.6)</td>
<td>0(0.0)</td>
<td>35(100.0)</td>
</tr>
<tr>
<td>大関</td>
<td>8(11.1)</td>
<td>35(46.3)</td>
<td>1(1.4)</td>
<td>16(22.2)</td>
<td>3(4.2)</td>
<td>2(2.8)</td>
<td>6(8.3)</td>
<td>1(1.4)</td>
<td>39(100.0)</td>
</tr>
<tr>
<td>大関</td>
<td>3(7.7)</td>
<td>27(69.2)</td>
<td>0(0.0)</td>
<td>3(7.7)</td>
<td>2(5.1)</td>
<td>0(0.0)</td>
<td>4(10.3)</td>
<td>0(0.0)</td>
<td>72(100.0)</td>
</tr>
</tbody>
</table>

(3) 看護学生と大学生の比較

札幌および札幌を合わせて看護学生群、大関（文系）および大関（理系）を合わせて大学生群とし、両群の比較を行った。分類基準ごとの出現頻度の内訳をみると、特定カテゴリーに集中する傾向があり、細分化したカテゴリーをすべて用いて比較することは困難であると判断し、複数のカテゴリーをまとめて、以下の点についてのみ分析を行った。

死が描かれているか（分類基準 A）「死を描かない」（A1）と「死を描く」（A2 ～ A4）の割合に注目し、χ²乗検定を行った。結果を表 5 に示す。看護学生と大学生との間で出現比率の差はなく（χ²(1) = 0.134（n.s.））。看護学生は死の形で死を描くことが比較的なものも多いという仮説は支持されなかった。学校別に見ると、札幌と大関（文系）、札幌と大関（理系）がそれぞれ類似した描画特徴をもっていた。

表 5 死を描くか否か（専攻分野別内訳）

<table>
<thead>
<tr>
<th>死を描くか</th>
<th>合計</th>
</tr>
</thead>
<tbody>
<tr>
<td>生徒・看護</td>
<td>0</td>
</tr>
<tr>
<td>生徒・大関</td>
<td>34</td>
</tr>
<tr>
<td>合計</td>
<td>34</td>
</tr>
</tbody>
</table>

人生がプロセスとして描かれているか（分類基準 B）

札幌学生と大学生いずれにおいてもプロセスを描いたものの割合は高く、特に平坦型プロセスが多かった。次に、プロセスを描いたものの中で、最も多かった平坦型（B6）と、それ以外（B2 ~ B5 と B7）との比較を行った結果、表 6 - 1、表 6 - 2 に示すように傾向差が見られ（χ²(1) = 3.536（p<0.1））。看護学生は大学と比べると、平坦型以外のプロセスを多く描く傾向にあり、この結果は示唆される。

表 6 - 1 プロセスを描くか否か（専攻分野別内訳）

<table>
<thead>
<tr>
<th>専攻</th>
<th>看護</th>
<th>大関</th>
<th>合計</th>
</tr>
</thead>
<tbody>
<tr>
<td>生徒</td>
<td>34</td>
<td>71</td>
<td>135</td>
</tr>
<tr>
<td>生徒</td>
<td>0</td>
<td>109</td>
<td>109</td>
</tr>
<tr>
<td>合計</td>
<td>34</td>
<td>180</td>
<td>214</td>
</tr>
</tbody>
</table>

* p<0.1

何によって人生を表現しているか（分類基準 C）

「人間」（C1 ～ C3）と人間以外のもの（C4 ～ C7）を比較した。χ²乗検定を行ったところ、差は見られなかった（χ²(1) = 0.094（n.s.））。そこで、人間を描いた学生のみ（C1, C2, C3 のいずれか）を対象として、描かれた人間が、自分自身なのか（C1）人間一般なのか（C2 および C3）について分析を行った。フィッシャーの直接法による検定（森・吉田、2003）を行ったところ、有意確率 0.062 であった。従って、看護学生と
大学生とで傾向差が見られ、看護学生の方が自分自身の人生を思い描く傾向があることが示された。結果は表7、表8-1、表8-2に示す。

表8-1 自分を描くか人間一般を描くか（専攻分野別内訳）

<table>
<thead>
<tr>
<th></th>
<th>本人を描く</th>
<th>人間一般を描く</th>
<th>合計</th>
</tr>
</thead>
<tbody>
<tr>
<td>専攻</td>
<td>看護系</td>
<td>14</td>
<td>30</td>
</tr>
<tr>
<td></td>
<td>Z大学</td>
<td>11</td>
<td>59</td>
</tr>
<tr>
<td>合計</td>
<td></td>
<td>25</td>
<td>89</td>
</tr>
</tbody>
</table>

$x^2 = 4.092, df = 1, p < 0.1$

表8-2 残差解析の結果（標準化された残差）

<table>
<thead>
<tr>
<th></th>
<th>残差解析の結果</th>
</tr>
</thead>
<tbody>
<tr>
<td>専攻</td>
<td>看護系 2.022*</td>
</tr>
<tr>
<td></td>
<td>Z大学   -2.022*</td>
</tr>
</tbody>
</table>

*p<0.1

(4) 描画例

人生プロセスの描き方の異なる例を抽出した（図1〜10）。

図2
描画中の言葉以外には説明なし。

図3
描画中の言葉以外には説明なし。

図1
描画中の言葉以外には説明なし。

図4
生まれてから色々な辛いことがいっぱいあるけど、それを乗り越えて大っきくなっていく。だから階段を昇っていく感じ。
ろうそくです。生まれたときにろうそくに火がつきます。ろうそくの長さはひと目やすらぎます。だんだん火も小さくなり、長さも短くなっているが、死ぬ瞬間に強く燃え上がります。人は死ぬ瞬間に最後の力を放出するそうなので。

人生を1日に、自分を花にたとえました。朝一番に生れて、午前中にまず1回芽を出して、昼に花を咲かせます。夜から午後にかけてかれていくようで、また別の花を咲かせるようになります。この花は木を登りながら成長していく花で、その木になっている果物の栄養をいっぱい吸収していきます。ハチとちょううちも栄養を運んでくれます。1回花を咲かせたら、木を下るように降りてきて、とった栄養の中で色々な毒素を排出して最後に一番美しい花を咲かせて夜中に帰っていきます。途中では雨も風もあったりして困難もありけど生まれたラインと同じところにもどります。

人の生まれて（誕生）から死ぬまでの太陽を例えてみました。誕生＝日の出。成長期（学生時代）＝昇っていく元気な太陽。30歳頃＝真夏に位置するデッカタカのしゃく熱太陽。まだまだ頑張るよ‼️ 死亡＝日の入り。お疲れ様でした。

花は若葉→つぼみ→花→種というサイクルを持っていて人間のサイクルに少し似ているなと感じました。だけど花は下がての根っこに支えられて立っていられるものです。それは周りからいろんな栄養をもらい、また外にはきそうだそこで周りの役にも立っている。根（支え）は年をとっても変わらずあるものだし、私は人生の中でも人の支えなしでは生きられない所もあると思うから増え続ける根の状態を書いてみました。
考察

看護学生の死生観をとらえることを目的として、「人生のイメージ画」を実施した。ここでは、大学生との比較において、死に対する意識、人生のプロセスに対する意識、人間に対する意識の3側面の特徴を検討し、次に個別の描画から見た特徴について考察する。

（1）大学生との比較から見た看護学生の特徴

死に対する意識について　描かれた「人生のイメージ画」を、死を描くかどうかという視点で分類し整理した。その結果、看護学生は看護専攻ではない大学生に比べて、相対的に多くの割合で描画の中に「死」を含むかの形で描くという仮説は支持されなかった。しかし、学校別に見ると、X高校看護科の学生における「死を描く」割合は、Y看護専門学校に比べて高いことが分かった。これについては考えられる理由の1つには、看護教育を受けてきた経験の長さに差があることがある。X看護およびY看護の学生はいずれも、ほとんどが18歳から19歳である。しかし、X看護の学生は高校入学時より看護科の所属学生として既に3年間が経過し、4年目の学生であるのに対し、Y看護の学生は高校卒業後、看護専門学校に入学して1年目であり、看護学を学び始めている。

資料

「人生のプロセスに対する意識について　専攻や学校の違いにかかわらず8割以上の学生が人生をプロセスとしで描いていた。全体としては、人生の各時期における出来事を順に描いていく時間経過型が多い。看護学生と大学生との間でプロセスの描き方に違いがあるかどうかを見るため、産地型と他のプロセスの割合を比較したところ、傾向差が見られた。看護学生は、世代間の連鎖を視野に入れた円環型や、山のように最高潮となる一時期をもつピーク型で人生をとらえるものの、その他複数の特徴を合わせ持つプロセスを描くもので、大学生よりも出現しやすいことがわかった。各プロセスの描画例については後述する。」

看護学生の場合、入学した時点で既に職業選択をしており、ある程度明確な人生設計を描くことができる。一方、一般大学生においては、学部や専攻領域にあるが、1、2年生の段階で具体的な職業選択はまだされていない。こうした職業選択の決定の過程が、人生に対するイメージに影響を及ぼしている可能性もあるが、今回の調査では確かめることはできない。

人間に対する意識について　人間を描くかどうかという点では、看護学生と大学生とで有意な差は見られなかったが、描かれた人間が「自分」であるという割合は看護学生の方が相対的に高かった。看護学生の方が自分の人生を思い描く傾向が大きいのは、「人生のプロセスに対する意識について」で述べたように、看護師という職業に近くという明確な目標にとどめて人生イメージを具体的に描きやすいと考えられる。大学生の場合、自分自身よりも人間一般的の人生として描く、他の生き物にかわって描く、何らかの形で描くという表現に見られるような、より一般化された、あるいは抽象化したとらえ方をする傾向があるのではないかと考えられた。

今後「人生のイメージ画」を用いて個人の死生観に接近するためには、何を描いたのか、なぜそのように描いたのか、ということについて、面接などで直接語ってもらう。
うことで深めていくことが欠かせない作業となってくるであろう。

(2) 個別の描画から見た看護学の特徴

やまだ（2002a）は、「人生のイメージ画を通じて表れるライフサイクルをもとに、死をも含んだ世代間にわたるライフサイクル構築の構想を提案している。そこでは生涯発達のプロセスとして、成長モデル、熟達モデル、成熟モデル、両行モデル、過程モデル、円環モデル、という6つのモデルが示されている。これを用い

て、個々の看護学の経にとって人生のプロセスの描き方という視点から検討したい。

今回の調査で求められた絵で最も多くかかれた平坦型プロセ

ス（B6）は、やまだのモデル名に倣えば、図1や図2のような「過程モデル」に近いものであった。図1では「一般的な成長過程」に見るのが明暗されている。社会的な身分や役割の変化を基準に、それに合わせて変化する

の様子を描いている。赤ちゃんから若者までが描かれ、死

は描かれていない。図2ではコントラストは無かったが、図

1同様に社会的な身分や役割を区切りながら、発達段階の変化を描いている。最終の場面は具体的な老人の姿や死は描かれていない死を象徴するお墓が描かれている。

図3の円環型プロセス（B2）は、やまだの「円環モ

デル」に相当する。図3では、木が枯れて切られても、

その切り株を苗床として再び新たな木が生まれ育ち、こ

れが繰り返されるというイメージである。新たに育つ木は全く新しい場所でその芽を出すのではなく、古い切り

株と同じ場所で芽を出す様子が描かれている。大学生群

ではほとんど見られず、看護学生、とくにX看護に特

徴であった。

やまだの「熟達モデル」に近い絵としては図5のような上昇型プロセス（B3）が挙げられる。図4では「困難を乗り越え段階を昇っていく感じ」を描いたというので、その段階の最上段には死を象徴する天使が描

かれている。

図5は下降型プロセス（B4）として唯一分類されものである。生まれた時からそうに灯がともり年月を重ねに従ってどうそくは短くなっていく。最期の瞬間では、ろうそく自体は小さくても大きな炎を吹きと

されているコントラストからは、やまだの「両行モデル」に

近いのではないだろうか。

ピーク型プロセス（B5）を描いた図6は、「成熟モデル」として理解できる。人間の姿の変容だけではなくそれに並行して太陽の高さが描かれており、最も太陽が高いくところは30歳頃に相当するとのコメットがある。

図7は分岐型プロセス（B7）である。人生は様々な選択肢の中から1つの道を選び取っていくものであり、その過程で困難に遭遇することもある様子が描かれている。「過程モデル」の一つのあり方と考えられる。

少数ではあるものの図8から図9のような絵も見られ

た。これらは、単一のモデルでは説明しきれない、複数のモデルが混在していると考えられる。図8の絵では「昼

に花を咲かせ、かくれていく様子でまた別の花を咲かせる……

花は木を下りつつ最後に1つ美しい花を咲かせて闇の中へ帰っていく」という説明がなされている。これは成

熟モデルと円環モデルが混在した絵になっているというえる。

図9の絵では「人間のサイクルと花のサイクルが似

ている。花は根に支えられて立っていてされる」という説

明がなされており、地上に見える花は枯れてしまうが、

地下に伸びた根は周囲からの支えをなし、最後に近づ

けば近づくほど増え続けて地中に伸びていく。また、次

の世代を担う緑から地を落ち着いていく様子も描かれていた。

こういったことから、生まれてから死ままで周囲と人にと

との相互作用の連続というように捉えられていることが分

かる。先行研究との比較でいえば、熟達モデルや両行モ

デル、円環モデルの混在したものと見なせるのではない

だろうか。

また、プロセスを描かなかったもの（B1）として図

10のような絵が見られた。図中の線は蛇をイメージした

もので、自分の生まれた季節にあった植物（の葉）や自

分の夢などもイメージとして表現している。

円環モデルや両行モデルに当たるイメージ画には、次

世代とのつながりや、一面ではない人生の意味について

考える視点の萌芽があると考えられ、グループワーク

などで活用する中で、こうした人生プロセスのとらえ方

の違いに着目して話し合うことによって死観を深めて

いくことができるのではないだろうか。

まとめと今後の課題

将来現場で終末期医療を施す際に必要とされている看

護師の死観に関して、看護師を目指す学生と他の同年代の

学生とでのどのような差異があるのかをとらえることを

目的として調査を行った。方法として「人生のイメージ画」を用いることにより、能動的・概念的レベルではな

い内容的なイメージを把握することを意図した。看護学生

死に対する関心や意識が高く、イメージ画の中にそ

れが描かれる傾向があると予想したが、仮説は支持され

ず、学校により異なるという結果が得られた。また、人

生のプロセスに対して、人生を発達段階ごとの出来事の

連鎖として描く「平坦型プロセス」が被験者全員に多っ

たが、中でも看護学生は大学生に比べて「円環型」

や「ピーク型」などが出現在やすいこと。また、人生を
【付録1 『人生のイメージ描画』の分類基準】
分類基準A：死が描かれていないか。
ここで「死が描かれていない」とは、死んだ人間の姿、死を象徴する物や出来事、他の生き物や事実の衰退にたとえた表現を含む。以下の3つのいずれかに分類する。
A1 死が描かれない。
A2 人間または動物の死を描く（周囲に誰も人がおらず、一人の状態）。
A3 人間または動物の死を描くが、周囲に家族や親しい人がいる（何人でもよい）。
A4 死が描かず、「死」という文字や、天使・十字架・お墓・闇、黒枠の写真や葬式など、象徴的に表現される。植物が枯れていきようそうが消えている場合なども、このに含めた。
A5 分類困難。
注：人間または動物の姿（A2かA3）と象徴的表現（A4）が同時に描かれているときは、人間または動物が描かれていることを優先して分類し、ブレンドは避ける。

分類基準B：人生がプロセス（時間的経過）として描かれているか。
「プロセス」とは絵の中に時間的変化が描かれているものを指す。矢印で経過を示したり、ベーリングから老人へと変化していく様子を描くように描かれていたらする場合である。以下の8つのいずれかに分類する。
B1 プロセスが描かれない。人生の1場面を写真に撮ったように描いたものや、一つの事象で人生を表現したもの。
B2 円環的プロセスを描く。円環的とは死で人生が終わらず、彼がつながっていくことを意味している。別の命として生まれ変わる、かたえ世代として

B3 命がつながっていくことを、始点と終点を重ねたり矢印でつなげることで表現しているもの。「生まれ変わる」という言葉で書いていても、矢印などで始点の絵へのつながりがなければ円環的としない。次の世代（子ども）が今人の人生のプロセスの一部として描かれていても円環的としない。
B4 上昇するプロセスを描く。階段をステップアップするように上昇していく、増加していく、大きくなっていく、など。
B5 下降するプロセスを描く。階段を下りるように下方向に向かっていくもの、衰えていく過程を描くもの。
B6 山のようにピーク（頂点・アクセント）を描く。花が咲き誇るなど、盛りの時期をもつ場合も含める。単に、手前や位置している大きさ描いていてもそれはピークとは見なさない。絵についてのコメントもないものを参考にして判断する。
B7 迷路のように分散点のあるプロセスを描く。遮断肢をつくり複数のライフコースを表現。
B8 分類困难なもの。たとえば、花は枯れるのが速くしかなくしく濃い色、といったような重複もここに分類する。

分類基準C：何によって人生を表現しているか。
以下の8つのいずれかに分類する。
C1 人間を描き、本人が登場する。自己自身本人そのものの変化を人生を描いたものだと捉えている場合はこの分類に入れる。
C2 人間を描き、人間が人生として描いたもの。
C3 人間を描きが、本人も人間が他分が困難な場合。
C4 植物や動物など（生と死がある）他の生き物の一生を描いて描く。
C5 人生を自然の風景（山、海、川、谷）や天気の変化などに見たてて描く。
C6 人工物により人生を象徴的に描く。たとえば、花火（はなかざ）やダールマ（教えぬもの）などに見たてて描かれた例がある。
C7 直線や幾何学的な形図、曲がりくねった道具、迷路を描く。
C8 その他、分類困難なもの

注1：C1かC2かの判断には、付加情報としてコメントの記述も参考にした。
注2：人間や生き物が登場していても、それが中心テーマではないと見なされる場合は、C4～C7に分類した。

引用文献

アルフォンス・デーケン 1987 がん患者に接するナースの“どこま” 月刊ナーシング、7（9），38-39。
茶谷美香・岩瀬恵美 2003 終末期の看護実習における「死生観」の変化－実習レポートの内容分析－慶應義塾看護短期大学紀要、13、63-71。
平井啓 1999 死生観に関する研究（1）－死生観尺度の開発－死の臨床、34、22（2）、245。
平山正実 1991 死生学とはなにか 日本評論社。
金児昌明 1994 大学生とその両親の死の不安と死観人文研究 大阪市立大学文学部紀要、46、1-28。
加藤義信・やまだようこ 2002 日仏青年が抱いている素朴「他界観」と「たましい観 愛知県立大学大学院国際文化研究科論集、3、47-72。
河合平子・下仲順子・中里克治 1996 老年期における死に対する態度 京都社会学論、17、107-116。
河田（水野）芳子 1982 連想詩画にあらわれた看護学生の看護観想 看護展望、71（1）、82-91。
河田芳子 2004 教育実践報告ヒューマニスティックアプローチを用いた授業での学びの様相－連想詩画法による授業感想文の内容分析を通して Quality-Nursing 10（3）、251-256。
菊池和子 2000 看護学生の死生観－Purpose-in-Life Testの分析より－岩手県立大学看護学部紀要、2、91-98。
Leininger, M. M. 1992／稲垣文昭監訳（1995） レイニンガー看護論－文化ケアの多様性と普遍性 医
学書院 25。
森敏昭・吉田寿夫 2003 心理学のためのデータ解析テクニカルブック 北大路書房。
新見明子 2002 看護学生の死生観－Purpose in Life Test分析より－川崎医療短期大学紀要、22、25-30。
大山由紀子・沖野良枝 2003 看護職と看護学生の死生観の傾向に関する比較研究 第34回日本看護学会論文集 看護総合、34、75-77。
竹下美恵子・魚住郁子・渡辺幹生・伊藤豊美・近藤里美・寺田美恵子・渡口高子・今井範子 2001 看護学生の死生観に関する研究第3報－領域別臨地実習前後の比較－第32回日本看護学会論文集 看護総合、32、76-78。
丹下智香子 1995 死生観の展開 名古屋大学大学院教育発達研究科学科紀要、42、149-156。
谷中吉 1991 医学的看護学における死の教育 櫻口和彦・平山正実（編） 生と死の教育－デスエデュケーションのすすめ 創元社、171-196。
やまだようこ 1988 私をつつむ母なるもの イメージ画にみる日本文化の心理 有斐閣。
やまだようこ 1995 生涯発達のモデル 無藤隆・やまだようこ（編） 生涯発達心理学とは何か 講談生涯発達心理学第1巻 金子書房。
やまだようこ 2000 日本文化の生命循環と生涯発達観 小嶋秀夫・連水敏彦・本城秀次（編） 人間発達心理学 金子書房、106-115。
Yamada, Y., & Kato, Y. 2001 Images of the soul and the circulation cosmology of life: Psychological models of folk representations in Japanese and French youths’ drawings. 京都大学教育学研究科紀要、47、1-27。
やまだようこ 2002a 生涯発達心理学の課題と未来 小嶋秀夫・やまだようこ（編） 生涯発達心理学 放送大学教材、203-224。
やまだようこ 2002b 現場心理学における質的データからのモデル構築プロセス：「この世とあの世」イメージ画の図像モデルを基に 質的科学研究、1、新曜社、107-128。
Yamada, Y. 2002 Models of life-span developmental psychology: A construction of the generative life cycle model including the concept of "death". 京都大学大学院教育学研究
ABSTRACT

Life and death images of nursing students: Exploring their life and death perspectives through picture-drawing

Miyako MORITA and Tomohisa OHNISHI

In this report, we studied the nurses' view of life and death in the context of terminal care. First, our research aimed at what kind of difference there is about the view of life and death between nursing students and ordinary college students. Second, we sought to compare their perceptions of life and death based on conventional life span developmental psychology. We utilized picture drawings as a means of grasping their image of life and death, rather than questionnaire reports. We hypothesized that there would be a tendency for the nursing student to have higher content of life and death images in their drawings, relative to other students, since they would have more opportunities to discuss these issues within their course work. However, this hypothesis was not statistically supported. The reason for this may be that there were differences in the contents of the courses which nurses have taken.

Key words: nurse, terminal care, picture-drawing, image, life and death perspective